



TITLE:

社会構造分野(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

加納, 隆至; 大澤, 秀行; 鈴木, 晃

CITATION:

加納, 隆至 ...[et al]. 社会構造分野(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1994, 24: 19-21

ISSUE DATE:

1994-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164619>

RIGHT:

- 2) 山極寿一 (1994): クモザル亜科と類人猿の社会進化. 生物科学, 46(1): 34-46.

報告・その他

- 1) 山極寿一 (1993): キンビリキッティの自然観. 遺伝, 47(6): 4-5.
- 2) 山極寿一 (1993): ゴリラの繁殖計画へ向けて. どうぶつと動物園, 8: 8-11.
- 3) 山極寿一 (1993): ゴリラとの対話—言語以前のコミュニケーション. FLAME, 13: 17.
- 4) 山極寿一 (1993): 自然保護計画の現状と問題点—森の国・ザイールの試み. 創造の世界, 88: 107-127.

学会発表

- 1) 森 明雄 (1993): ニホンザル幸島群における給餌実験からみた採食戦略. 第9回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 9(3): 258.
- 2) 杉山幸丸 (1993): 一つの目的に複数の道具を複合的に使う野生チンパンジー. 第12回日本動物行動学会大会発表要旨: 43.
- 3) 杉山幸丸・横田直人 (1993): ボッソウ・チンパンジーの個体群構造. 第9回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 9(3): 264.
- 4) 山極寿一 (1993): ヒガシローランドゴリラの個体群動態. 第30回日本アフリカ学会学術大会研究発表要旨: 21.
- 5) 山極寿一・丸橋珠樹・ムワンザ＝ンドゥンダ・湯本貴和 (1993): 採食生態から見たゴリラとチンパンジーの共存関係. 第9回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 9(3): 262.

社会構造分野

加納隆至・大澤秀行・鈴木 晃

研究概要

- A) 中央アフリカザイール森林における野生ボノボの社会及び行動の研究

加納隆至・橋本千絵¹⁾

ザイール共和国ジョル地区ルオ学術保護区ワンバ森林においてボノボ (ビッグミーンチンパンジー) の研究を行っている. ザイールの政情は不安定で現地調査は中断中であるが, 研究結果のとりまとめは進行中である.

- B) コンゴにおける野生チンパンジーとゴリラ研

究

加納隆至

1993年度科学研究費補助金 (国際学術研究) により行ったコンゴ共和国北東部のモタバ川流域におけるチンパンジーとゴリラの密度と狩猟圧に関する研究のとりまとめが進行中である.

- C) 東アフリカにおける野生チンパンジーの研究

加納隆至

東アフリカで現地調査を行い, 広く野生チンパンジーに関する情報を収集した.

- D) 性淘汰, 社会構造に対する要因としての霊長類メスの繁殖戦略

大澤秀行・光永総子²⁾

霊長類における性淘汰, 及び社会構造に影響を及ぼすメスの性行動を研究している. メスの生殖生理学的な解析が重要であるため, 生理学研究者と共同し, これまで放飼場やグループケージ飼育ニホンザルについて調べてきた.

- E) アフリカ乾燥サバンナにおけるオナガザルの野外研究

大澤秀行

カメルーン北部のカラマルエ国立公園において, バタスザルとミドリザルの野外研究を1984年より続けている. 繁殖期に社会変動と繁殖行動の関係について資料を収集している. 1993年度は出産期に, 共同研究者 (シオン短大・中川尚史) が, 新生児をめぐる社会関係の資料を収集した.

- F) オランウータンの社会的, 生態学的研究の続行とまとめ

鈴木 晃

1983年より, インドネシア国東カリマンタンのクタイ国立公園で行ってきたオランウータンの野外調査を継続 (1993年5-6月, 1993年9-11月). さらにこれまでの資料と結果のまとめに取り組んだ.

バジャジャラン大学との共同研究のための体制づくりのための準備もこの間に行った.

特に1993年6月には, 同大学総長の依頼で, 「霊長類の研究の意義と日本の研究者の国際的位置」について講演を行った.

- G) マカク類の比較社会学的生態学的研究

加納隆至・大澤秀行・松村秀一¹⁾

揚妻直樹¹⁾・小川秀司¹⁾・田中香¹⁾

マカク類の社会進化を明らかにするため, ニホンザル (屋久島・高崎山・嵐山・金華山) および,

アジアに生息する他のマカク類（中国のチベットマカク・インドネシアのスラウェシマカク）の社会をその生息地で研究している。

H) その他の哺乳類の社会行動研究

加納隆至・大澤秀行・瀬戸口美恵子²⁾・
小林隆¹⁾・柳原芳美³⁾

タイワンリス・半野生馬・アライグマについて、
社会行動の調査を行い、霊長類とは異なる視点から
も動物社会学的研究を行っている。

論文

—英文—

- 1) Inoue, M., Mitsunaga, F., Nozaki, M., Ohsawa, H., Takenaka, A. and Takenaka, O. (1993): Male dominance rank and reproductive success in an enclosed group of Japanese macaques: with special reference to post-conception mating. *Primates*, 34(4): 491-502.
- 2) Mitsunaga, F., Nozaki, M., and Shimizu, K. (1994): Suppressed copulatory behavior and ovarian function in lactating Japanese monkeys (*Macaca fuscata fuscata*) during the mating season. *Primates*, 35: 79-88.
- 3) Ohsawa, H., Inoue M. and Takenaka, O. (1993): Mating Strategy and reproductive success of male patas monkeys (*Erythrocebus patas*). *Primates*, 34(4): 533-544.
- 4) Suzuki, A. (1994): Food adaptation of orangutans after the big forest fires in East Kalimantan, Indonesia. In *Proceeding of International Orangutan Conference, The Neglected Ape*. California State University, Fullerton, U.S.A. P.24

—和文—

- 1) 橋本千絵(1993):ウガンダ共和国カリンズ森林のチンパンジー. 霊長類研究, 9(2): 113-118.
- 2) 杉浦秀樹・揚妻直樹・田中俊明(1993): 屋久島における野生ニホンザルへの餌付け. 霊長類研究, 9(3): 225-233.

報告・その他

—英文—

- 1) Ingmanson, E.J., & Kano, T., (1993): Waging Peace. *International Wildlife*, 23(6):30-37.

—和文—

- 1) 揚妻直樹(1993):ヤクザル生息実態調査報告. 第5章これからの猿害対策に向けて. 鹿児島大学農学部鳥獣害研究会編 pp. 173-175.
- 2) 松村秀一(1993):スラウェシのムーアモンキーの社会. モンキー, 247: 18-23.

学会発表等

—英文—

- 1) Suzuki, A. (1994): Food adaptation of Orangutans after the big forest fires in East Kalimantan, Indonesia. In *The International Conference on Orangutans. The Neglected Apes*. California University, Fullerton, U.S.A. Mar. 5-7, 1994, p.24.

—和文—

- 1) 揚妻直樹(1993): 屋久島の自然をめぐる現在の状況. 平成5年度京都大学霊長類研究所共同利用研究会・第10回ニホンザルの現況研究会.
- 2) 揚妻直樹(1993): 野生動物保護を目的とした植生回復方法. 平成5年度京都大学霊長類研究所共同利用研究会・屋久島のニホンザル地域個体群の構造と保存.
- 3) 揚妻直樹(1993): ヤクシマザル隣接群の採食・遊動様式の比較. 第41回日本生態学会講演要旨集, 133.
- 4) 揚妻直樹・東 英夫・後藤俊二(1993): ラジオテレメトリーによるニホンザルの体温測定. 第9回日本霊長類学会, 霊長類研究, 9: 283.
- 5) 揚妻直樹・Hill, D. A. (1993): ヤマモモ果実の豊作年と凶作年におけるヤクシマザルの採食遊動様式の変化. 第40回日本生態学会講演要旨集, 136.
- 6) 橋本千絵(1993): ウガンダ共和国カリンズ森林におけるチンパンジーの生態学的研究(予報). 第9回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 9: 261.
- 7) 光永総子・野崎真澄・清水慶子(1993): オス間競争排除実験におけるニホンザルメスの

- 配偶者選択. 第9回日本霊長類学会大会. 霊長類研究, 9: 281.
- 8) 小林隆(1994):都井岬の半野生馬におけるにおいづけ行動.第41回日本生態学会講演要旨集. 71.
- 9) 小川秀司(1993):霊長類におけるしかえしシステムの進化.第9回日本霊長類学会大会.霊長類研究,9: 296.
- 10) 小川秀司(1993):霊長類におけるしかえしシステムと弱虫ゲームにおけるTFT戦略.日本動物行動学会第12回大会発表要旨集, 35.
- 11) 杉浦秀樹・揚妻直樹・田中俊明(1993):西部林道におけるヤクシマザルの餌付きの実態.平成5年度京都大学霊長類研究所共同利用研究会・屋久島のニホンザル地域個体群の構造と保存.
- 12) 田中香(1993):野生ニホンザルの採食場所選択とその発達.第40回日本生態学会大会講演要旨集,133.
- 13) 田中香(1993):野生ニホンザルの採食行動の群間比較.日本動物行動学会第12回大会発表要旨集,35.

行動神経研究部門

思考言語分野

松沢哲郎¹⁾・藤田和生²⁾・友永雅己³⁾
平成6年4月1日新設

認知学習分野

小嶋祥三・松沢哲郎¹⁾・藤田和生²⁾・友永雅己³⁾・中村克樹⁴⁾・南雲純治

研究概要

A) チンパンジーの聴覚と音声に関する研究

小嶋祥三・橋彌和秀⁵⁾

視覚-聴覚間の見本合わせ課題により, チンパンジーの感覚間統合の研究を行った。チンパンジーにとってこの課題の獲得, 遂行は容易でないが, 聴覚刺激に基づいて「人」「物」の概念が成立していることを示唆する結果を得た。

B) 老齢ニホンザルの認知機能の研究

小嶋祥三

連続物体弁別逆転学習により, 老齢ニホンザル

の保続あるいは学習セット形成に関する認知機能を検討した。個体差があるが, 一般に若年のサルと比較して, 連続逆転の成績が劣っていた。

C) 飼育下チンパンジーの出会い場面の音声および社会的交渉

小嶋祥三・岡本暁子⁵⁾・揚妻直樹⁵⁾

別の居室で夜を過ごす2群のチンパンジーを開放飼場で出合わせ, その時生じる音声を含む社会的交渉を検討した。群間の個体の交換などいくつかの実験的操作を行い, その影響を調べている。

D) チンパンジーの認知的・言語的機能の比較認知科学研究

松沢哲郎・友永雅己・Iver Iversen⁶⁾・

田中正之⁵⁾・日上耕司⁷⁾

チンパンジーとヒトを対象に, 認知的・言語的機能の比較研究をおこなった。文字や数の体系とその記憶, コンピュータ利用の描画行動, 指さしや身ぶりによるコミュニケーション, 放飼場での社会的知能の研究などをおこなった。

E) 野生チンパンジーの道具使用と文化的変異

松沢哲郎

西アフリカのギニア・ボソウとコートジボワール・ニンバの野生チンパンジーを対象に, 道具使用にみられる認知発達を研究し, 文化的伝播の実態と機構について調査した。

F) マイノリティーの文化的伝統と教育

松沢哲郎

パキスタン・フンザ地方からパミールを越えて中国カシュガルに到る地域で, ブルシャスキー族とキルギス族を対象に, 社会変化と教育の役割にかんする野外調査をおこなった。

G) 霊長類の錯視知覚に関する比較心理学的研究

藤田和生

アカゲザルとチンパンジーを対象に, ポンゾ錯視の知覚の分析をおこない, ヒトやハトと比較した。

H) ニホンザルの視覚探索

藤田和生・金沢創⁵⁾

- 1) 5.9.1 認知学習分野より思考言語分野へ
- 2) 5.12.1 認知学習分野より思考言語分野へ
- 3) 5.11.10 認知学習分野より思考言語分野へ
- 4) 6.3.9 行動発現分野より認知学習分野へ
- 5) 大学院生
- 6) 招へい外国人学者/外国人研究員
- 7) 日本学術振興会特別研究員